

Title	保守と社会構造
Sub Title	Conservatism and social structure
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.41 (1961. 12) ,p.165- 181
JaLC DOI	
Abstract	<p>It is said that the human nature is afraid of unknown future or change and wishes maintenance of status quo. However this kind of tendency cannot be found in an original nature of man. Instead, this trend of conservatism is usually derived from the social characters that is based on some social structure. In this article I assume that a change is the normal process of society. From this point of view it is my task to identify the factors that interfere with this normal process: that is the so-called power of tradition. Up today, people were searching for variables that caused the process of change in society. I believe that by taking a factors that I have stated above, I can analyze the problems more dynamically. The Attitude of Conservatism When human beings take a conservative point of view, this basic attitudes may be divided into the following kinds: (1) real-orientation type (the maintenance of status quo is to be directly man's advantage), and (2) value-orientation type (based on "ought to conserve some value contents). Moreover, there are two types of people who take a conservative attitude: (a) ruler and (b) masses. The Types of Society First I view social relation in two categories: they are "spontaneous" and "institutional" relations. Secondly I want to emphasize the difference between "collectivity" and "individuality" of social principles. If we combine these two categories into one system, they become (A) collectivity-spontaneous (B) collectivity-institutional (C) individuality-spontaneous (D) individuality-institutional. Lastly, I should like to integrate the attitude of conservatism [I classified them with the symbols of (1) (2) and (a) (b)] with the types of society [I used the symbols of (A) (B) (C) (D)]. (A) takes (2) (b). This is a most extremely closed type that is most repugnant to the innovation of culture. (B) takes (1) (a). Here an acceptance of culture is to be decided by an opinion of its leader who adheres to tradition. However, the adaptation to novelty will be rapid when this system begins to fall. (C) takes (1) (b). In this case a tendency of conservation is most weak. However, as a reaction to its extreme progressivism, a conservatism is tend to arise. (D) takes (2) (a). This is a closed type. But this is not so much resistant to change as (A) above. It does not run after novelty. But a reinterpretation of the tradition will be highly appreciated among the people.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000041-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

保守と社会構造

横山 寧 夫

社会の進歩に対する何等かの基準を以て世界をみれば、明らかに先進国と後進国とが区別され、また一国内においても高度に進んだ地方と著しく停滞している地方がある。その理由としては自然的与件から文化的与件に到る無数の条件が考えられるが、就中、文化或は技術革新に対する斥力として各社会に独自の伝統的乃至保守的思考の作用を見逃すことはできないであろう。伝統への沈潜は古い文化が新しい文化に移行するとき再創造の基礎ともなるものであると同時に、その同じ価値意識が歴史の逆行にも導くのである。従つてそれは一面では確かに社会の進歩を阻害するところの執拗な反対者であつた。例えば東洋社会における根強い宗教的因習に培われた保守的思考は、人間生活が必ずしも合理性のみに支配されるものでないにしても、歴史の進行に大きな制動力であつたことを認めねばならない。ところで従来社会変動論は変化を阻止する要因よりもむしろ変化を惹起する要因の探求に力をそゝいできた。併し社会自体をノーマルに（合理的に）進行する過程とみると、当然変動や改新を期待さるべき状況において必ずしもその方向に進行しない場合を吾々は数多く経験する。この必然的・理念的变化を制約する斥力の一つを伝統的保守意識の観点より捉えることが当面の課題であり、これは特に現代社会をダイナミックに分析する有用な拠点を提供するように思われる。私はこれを巨視的立場から分析しようと思う。

人間がその本性として未知なものや変化を恐れ、現状維持を欲する傾向をもつという考えは論者の中にかんがりの支持を得ているようである。例えばマンハイムは「保守主義」なる論文の中で伝統主義的行為を多かれ少かれ人間の中に作用する純粹に反応的・形式心理的本性として解し、この伝統主義 (Traditionismus) を歴史的・社会的構造関連における意味志向的行為としての保守主義 (Konservatismus) から区別した。これはヒュー・セッルのいう「自然的保守主義」(natural conservatism) と「保守主義」の区別とほぼ同じである。マンハイムに則していえば、伝統主義は人間の普遍的心性であり、保守主義は一切の改革主義に反対する社会学的範疇として区別して考えられている。そしてこれが政治的進歩主義者が私生活において伝統主義的行為し、逆に政治的保守主義者がその生活習慣においては進歩的に振舞うことのできる理由として挙げられているのである。

併しこれには古い精神論が前提されている。人間の「本性」については社会学的にはむしろ社会的学習の結果を重視するのが差当り妥当であろう。確かに吾々は現状のままを欲し、未知なるものの不安から変化を躊躇することもあるが、同時に冒険を愛し、新奇なるものを好む傾向も吾々の性質の一部として認めねばならない。人間性が変化に抵抗するか、変化を愛好するかは同時に社会的・文化的要因を顧慮せずにはわかりに断定し難い。現代人はむしろ変化を積極的に歓迎する傾向さえある。これに現代文化の急速な発達によつて人々が変化に馴れて来たということにも関係がある。併しこのような発達の稀な処では変化は稀であり、人々は変化に対する不安をより多く抱くであろう。従つて人性の保守的性格は長い社会生活からの惰性、特殊な社会構造に由来した社会的性格とみるべきである。而して前述の例で進歩主義者がその私生活で保守的に振舞いうるというのは、私生活において始めて彼が人間の本性に還るのではなく、むしろ一定の社会的条件におけるパースナリティの分裂的現象として捉えるべきであろう。一般に社会に

おける人格の分裂はその社会の文化自体が多元的に分裂し、種々の基準が混乱している場合に個人の統一が失われることに由来するものであるか、或は社会的権力が個人に過大な要求をつきつけるときその欲求不満が人格の他の極において全く矛盾した行動を惹起するものと考えられる。このようにみえてくると政治的進歩主義者が家庭内で封建的暴君の如く振舞い、保守主義者が私生活において新奇を追うという現象は社会の構造的矛盾の反映として解釈する可能性が開かれる。現在の吾国にも見られるように前者の例は生活構造自体の変革以前に政治的変革が先行し、政治的理念が抽象的にのみ是認されている場合であり、後者の例は生活構造の変化が政治生活よりも先行している場合に顕著である。従つて人間行動の二元性は人間性とその社会的自覚の二元において考えられるものではない。

このように吾々が社会的・文化的革新期における新文化の導入を阻むものを考察しようとするならば、その方法として先づその社会の伝統的心性一般の内容を分析し、これを各社会構造類型の中に定位し、次にこれを独自の性格に拡大或は変異せしめる要因を現実的特殊性において理解すべきである。この伝統的・保守的心性の分析に当り、変化に抵抗する重要な心理的特質をよび起す契機として先づ慣習の検討から始めよう。

慣習は法的評価と道徳的評価の混合したものといわれる。即ち法ほどの外面的義務も持たず、また道徳ほどの内面的義務をも持たないという意味であるが、その二重の力を自己の中に結合している故に法や道徳以上の強力さをもつ。そして一般に社会を支配しているのはこの慣習なのであつて、人々は慣習に対する違反よりも人倫に対する違反にむしろ寛容な場合さえある。特に原始社会では慣習は重要な役割を占めていた。原始民族において生活形式の墨守には、その変更のために起るべき呪術的不利益に対する不安、及び未知なるものに対する恐怖と無知に由来する不安が大きく支配する。また原始人は慣習の支配を宿命的に当然のこととして受入れ、任意的・自発的行動が極度に限定

されているために保守的行動は著しくあらわれる。尤もそこに全く自由がないわけではない。或る慣習規範に従う動機は彼等の間でも多様であるが、個人の自覚のない単純な同質的社会では慣習規範との葛藤において個人的に悩むことがより少ないのである。逆に社会が異質的となり、個人がますます社会から分化してくると、人々はその規範に対するあり方もそれに従う動機も多種多様となり、保守の内容にも多彩な意味を加えるようになる。現代社会では一般に未分化的・自然発生的な伝承に対して絶えず変化する状況に應ずる客観的な規範の確立と共に、一方大衆化状況における流行現象のように暫時的・流動的な習俗が活潑化するため、従来の永続的伝承性を基礎とする慣習が次第に薄れてゆくことは否定し難い。

慣習が価値的に反省されるとそれは伝統とよばれる。伝統の概念については屢々多義な見解が示されているが、伝統を慣習と比較してみると、慣習が意識されない規範であるに対して、伝統はより持続的であり意識的であり価値評価されつゝ伝承される精神的遺産であるといえよう。従つて現在の問題への態度によつて或る種の人々には積極的に伝統であつても、他の人々にはマイナスの評価しかうけない因習として扱えられることもある。それは同じ場所に住む同じ血縁または地縁において個人を超えた集団に関して問題となるものである。それは価値の意識であるから、単に古いものの受容ではなく、再創造されることによつて自己を保存するものであつて、単なる慣習の盲目的追従の場合には伝統主義的という言葉でよばれる。支配の非合理的形態を意味するものとしてマックス・ウェバーが用いたこの用語はかなり広義の概念である。ところで伝統には、(一)たえず内部の根源に向つて深化してゆこうとする求心性、(二)外部に対して拡大してゆこうとする遠心性、が存在する。これらは伝統の質を考へるために重要である。求心性は伝統の根源に立還り、その生々とした価値意識を以て文化の再創造に生命を附与する活力であり、一定の社会の

中に生れた人間が自己の存在や生活の基礎に置くものであつて、求心性の強い伝統をもつ社会はその保守性にも拘らず、一定の原理から諸多の文化を包容することができる。例えば「既に出来上つたものに対する畏敬の念を知らぬ芸術家は……人間的にも芸術的にも故郷をもたず、自己の素姓を守つてくれる諸秩序の外に立つ」(A・シュミット)と
いうような意味での伝統がこれである。これに対して伝統の遠心性はやゝもすると伝統を拡大し、客観化、固定化に導くものであつて、これは精神文化に不可避の運命であるが、遠心性の強い伝統をもつ社会ではその保守性は極めて形式的或は稀薄なものになり易い。例えば「その創始者を忘れることを躊躇する科学は滅びる」(A・ホワイトヘッド)というような意味での伝統は幾分これに通ずるものがある。ただこの求心性にも自由にその根源を解釈する場合と、その内容を上から一義的に方向づけられる場合とがあり、遠心性についてもそれが次第に保守的性格から遠ざかつてゆく場合と、ますます慣習社会に墮す場合を注意しておこう。かくてここに四つの類型が指摘される。

慣習が人々の間に積極的な評価を受け、それが伝統となつて強力な精神的支柱となつている例を中国の「礼」の思想に求めることができる。中国において「礼」は法と道徳を包み社会生活を規制する中心であつた。礼において習慣が重視されていることは争えぬ事実である。「学んで時に習う」——知識は反復学習され、それが習慣にまでなることによつて達成される。道徳も習慣を通じて獲得され、「心の欲する処を行えども法を超えず」という状態が理想とされる。この繰返された経験によつて徳性が形成されるという信念は道徳における習慣の重視を意味している。この経験は個人的経験をこえて社会的経験、即ち慣習に及ぶものであるから、従つて社会的慣習もやはり高い評価をうけることになる。これは価値的に自覚されて伝統となるものであつて、この伝統を尊重する文化は一般に(特に過去の)中国文化の精神的背景となり、そこに独自の伝統的保守性を形成したのであつた。

日本人の生活態度も儒教の影響を強く蒙つてゐる。その指導的な根幹を吾々は「みち」とよんだ。「みち」は人倫の規範であるが、それは同時に慣習の規範性であり、制裁力や統制力をもつものである。この「みち」によつて社会構造が維持されると共に、それは亦社会の保守的要因としても強く作用する。「みち」は人々をして行動の試行錯誤を繰返せしめる必要もなく、予め用意された規範の中にたゞ従えさえすればよいからである。この「みち」の中で重要なものに「和」と「分限」の思想がある。いう迄もなく和も分限も日本の過去の政治体制や家族制度の下に発達してきたものであるが、この和は固定的な社会秩序への服従を前提とし、また分限意識も現状肯家の社会体制を背景としていた限り、ますます保守的社会意識を強化し、慣習や権威に優位を与える生活信条を生み出した。併しそれは過去の制度的体制の中に個人の自発性が抑圧されたままに一つの伝統を形成したのである。

却説、文化の変化における伝統の反抗的力が従来気付かなかつた筈はない。例えばオグバーンは「社会変化論」の中で文化の新形式に抵抗する力、即ち文化慣性(cultural inertia)の原因として次の如きものを挙げている。(一)古い形式の使用。即ち新形式を發明するよりも現存形式の評価転換をする方が容易な為に新需要或は新評価が旧形式の使用で間に合わされること。(二)既得権益の擁護。即ち一經濟階級の特別の利益を地代利子等から得ている人々はこれ等の収入源を危険ならしめるか或は不利に影響する変化に抵抗する。(三)伝統の力。即ち比較的文化の単純な民族間における新しいものに対する伝統的反抗。(四)習慣の心理的現変。即ち刺戟に対する反応は新しい途を発見するよりも更に容易に従来使用された途に従う傾向をもつ。(五)社会的圧力。即ち或種の社会的圧力に対する強制的適合は現在文化における変化を妨げる。(六)不愉快からの忘却。即ち過去は實際よりも輝やかしいものに実感され、吾々は過去の状態から変化することを好まない。(七)恐怖或は不安。これも人間を變化に抵抗せしめる要因である。

以上を要約すれば結局社会構造の外部からの要因(一)(二)(五)と、社会から生れる心理的要因(三)(四)(六)と、ということになるが、イデオロギー乃至知識社会学的立場から特に重要なものは社会の需要の体系とその社会のもつ保守的的思考型である。而してオグバーンは伝統の力を挙げながら、吾々の目的に対して余り立入つた分析をしていない。即ちこれを各社会類型の質的相違において基礎付けること及び文化内容の種類において夫々が独自の保守的体系秩序をもつ側面が注意されていないように思われる。当面の対象内容を一応非政治的(技術、芸術、宗教等)保守性と政治的保守性に区別して考察する。政治的保守主義については更に後に述べる。

技術及び科学などの合理性の領域はその本質から云つて保守的契機は稀薄の如く思われるが、客観的に技術革新を阻む要因は政策面及び感情面から数多く考えられる。政策面としては新技術の採用によつて経済構造に著しい変動を惹起し、それに伴う失業に対する社会政策的顧慮、また従来の技術に巨大資本を投入している資本家が新技術の採用を不利とみる顧慮、技術が悪魔にも仕えうる可能性からこれに反対する支配的イデオロギーに対する顧慮などが挙げられる。感情面としては民衆が緩やかな生活のテンポに馴れて変化を歓迎しないこと、新技術に対する生産者及び消費者の主観的及び客観的評価、特に宗教的観点から技術に対する偏見などが挙げられる。自然科学の領域は精神文化が質的・断続的進歩であるに対して累積的進歩であると云われる。これは歴史と無関係に集積しうるが、その中間に位置する文化科学・社会科学の領域はその問題性の発想が現実の歴史に基づく以上、進歩及び保守の勢力の争いは不可避であり、それ自体がまたこの領域の宿命であるとも云いうるであろう。

これらに対して芸術における保守性は芸術自体の構造の中に見出すことができる。それは芸術が人間の全体性に関するものであり、それを表現する独特の言語や概念の伝達が容易でないということにもよるが、美における客観的妥

当の規範の信仰とその存続を願う態度は芸術の保守的態度の一面を形成する。また芸術の技術には製作の技術が媒体となり、これを使いこなす能力を必要とすることも伝承性の制約を認めることができる。更に芸術が民衆にとつて生活の基本的な必需品でないこと、その高度化された段階では作品の創造者と享受者との美意識が離れすぎること、芸術における新奇なものへの変化を困難にする要因である。また芸術は屢々政治的意図を芸術様式の中に表現しようとすることもある。行動芸術が政治的前衛を代表するように、これに対蹠的な観照芸術が政治的保守主義と平行する場合もありうる。併し芸術は元来意識的に政治と同調するものではない。例えば吾々が現代芸術について優雅さの喪失を指摘するとき、それは確かに貴族社会から民主社会への推移をその背景にもっているものであるが、変化したのはその様式であつて、精神の故郷性、普遍的価値感情復帰への衝動は外面的変化ほどに動揺していない処に芸術の保守性が存在するであらう。

宗教の領域における保守性はあらゆる文化の中で最も強くあらわれる。それは宗教自体の本質が現世的時間に対してむしろ意識的に逃避し、唯一つの宗教への帰依の真实性を生命としているところにある。それは民衆の道德規範と結合して信仰というよりも生活様式として最も慣習化されやすい保守性をもっている。併し新宗教の受容はそれが政治と密接に結合するか、或は呪術的に理解される限りに行われることが多い。所謂新興宗教とよばれている現世利益的・呪術的な種類の宗教の発生がこれであるが、その裏には人間関係の現実的な変化が動いていることが見逃せない。例えば日本の新興宗教の隆盛を資本家側からの生産性向上運動との関係、即ち不安にあえぐ中小企業者や労働者に対する思想的対策としての宗教的教理が安定した生産性の源泉として奨励されたり、知識人の宗教が教説よりも思想的知識対象となりつゝある状況は次第に宗教の保守性を弱めてゆくものであらう。

次に保守の形式が問題となる。この形式は先づ(I)現実的保守と、(II)価値的保守の形式に區別することができる。現実的保守とはその保守すべき内容の如何に関わらず、現状の維持が自己の利益になるといふ現実目的に連なる場合の保守であるのに対して、価値的保守とは特殊な一定の価値内容を保守しなければならぬという当為に基づく保守である。就中後者の場合その態度には、(1)自発的支持と、(2)強制的追従とが區別されるであろう。自己の伝統により多くの価値を見出し、これに信頼するのは過去に長い歴史と業績とをもつ社会であり、逆に現実的利益のみによつて他の文化を無反省に採用するのは所謂社会的後進性、或は思想的安定を欠く社会であるといわれる。以上の保守形式はそれが人々に支持される仕方を基準としたものであつて、その内容に関していへば一切の譲歩を肯じないものと、場合によつては譲歩しうる融通性をもつものとのに分類する仕方も考えられよう。

保守の形式は更に別の角度から保守の担い手という立場からみれば、(a)指導者の保守性と、(b)大衆の保守性に區別することができる。この両者の相違は、大衆の保守性が極めて惰性的無意識であるのに対して、指導者の保守性は意志的・意識的であることを特長とする。大衆のその場合、集团的意志はとかく制度的なものによつて固定化され易いに対して指導者の保守はその階層的位地と保守との関係が極めて敏感な処に特色がある。次にこれらの保守の形式が各社会型の中に如何に定位されるかを考察しよう。

私は社会関係の基本形式を自発性と制度性とに分類しているが、これを歴史的にみると全体を主とするか個人を主とするかの基準に従つて次の四つの社会型態が考えられる。(A)共同的全体社会。この全体主義を基幹とする自発的社会は、例えば血縁の統一や神話的伝統を紐帯とする民族伝来の共同社会の如きを指す。(B)命令的全体社会、同じくこれが制度的に支持された社会とは、例えば専制的・軍国的社会にみられるような命令された統一社会を指す。(C)自由

な個人社会。この個人主義を基幹とする自発的社会とは規範に拘束されることの最も少ない自由主義社会の如きを典型とする。(D)原理ある個人社会。同じく個人主義を基礎とした制度的社会とは原理ある俗社会とも云われうるが、現在の英国などをその典型として指摘しうるであろう。(この社会型態についてホワード・ベッカーの社会型態(1) folk sacred society, (2) prescribed sacred society, (3) normless secular society, (4) principled secular society と對比されたい)

これ等の社会型態における保守性の性格は既に述べた(I)現実型と(II)価値型、及び(a)指導者型と(b)大衆型を結びつけてその理想型を得ることが出来る。また保守性の強度、或は他文化に対する寛容性乃至排他性の基準には伝統における前述の求心性と遠心性を用いるのが適當である。これらを総合して各社会型態における保守性の形式は次の如くに要約することができる。

(A) 共同的全体社会は(II)(b)型。文化の受容に対しては著しく閉鎖的であり、従来文化の保守が信念に近く最も強くあらわれる。大衆的保守型は指導者をとることがあつてもそれは下から推挙される形式をとる。伝統の遠心性は拡大し著しく固定化因習化される。

(B) 命令的全体社会は(I)(a)型。文化の受容に対しては指導者の立場における選択が強く作用する。指導者型と大衆型との区別が最も明瞭にあらわれる。伝統の求心性は強く求められるがその内容はややもすれば一義的に決定されやすい。而もこの体制は一度崩れ始めると新しい体制への順応も速やかに行われ、従つて新奇なもの受容も急速に無反省に行われる結果、極端から極端への波動も著しい。

(C) 自由な個人的社会は(I)(b)型。この体制は進歩主義的原理に基づく故に保守的契機は最も弱く、指導者型及び大衆

型の区別も最もあらわれにくい。伝統の求心性は最も弱く、遠心性は益々多様な質に拡散し伝統への無関心が支配的となる。たゞしこの体制の内部における反動としての保守主義的契機は注意を要する。

(D)原理ある個人的社会は(II)(a)型。この体制自体は閉鎖的ではないが、むやみに新奇なものを採り入れず、むしろ漸進的・改良的方法を基礎とする。指導者型は緩和されて大衆型に接近する。伝統の求心性は伝統の意味の再発見乃至再解釈として深化され、採用された文化を再構成する。従つてこゝでは極端よりも節度が尊重される。

以上述べた諸類型は現実社会の特殊な条件、就中需要の条件を顧慮しつゝ分析さるべきである。併し新しい文化の保守的力との斗争はそれを受容する場合と共に、受容した後にも起つて来ることがある。新文化の受容によつて従来文化の平衡が崩れて来ると、これを再び以前の状態に調整しようとする反動現象があらわれる。この解体の程度が一般に大きい程反動現象も大きいわけであるが、余り大きすぎる場合には復元力が抗しきれずに解体する。これを文化人類学では「土着運動」(R・リントン)或は「反文化変容」(ハースコヴィッツ)などとよばれている。尤もこれは一般的な公式であつて、元来伝統文化から逸脱の過程にあるか、これに欲求不満をもつ者ほど異文化に適合し易いという仮説からみれば、社会の大きな変革期においてはこの再調整への動きは社会の安定期に比べてより少ないものであると考えられる。またこれはその基礎となる社会型態が「命令された全体社会」であるか、「原理ある個人的社会」であるかによつても異なるであらう。前者の場合には反動現象は起り難く、後者の場合には起り易い傾向をもつ。また異つた文化論からではあるが、ジムメルが形式の崩壊によつて生は新たに生の直接性に適応した新表現形式を生み出すが、旧形式の崩壊以前にこれが現われると客観的となつた価値への強調や旧い形式への愛着が新形式への斗争を惹起することに注意したのは傾聴すべき処がある。

以上は新文化への斥力としての保守的態度をやや形式的に考察してきたものであるが、次に保守の内容について立入つて述べたい。一般に保守を単に古いものを固持すると云うのみではその真意を伝えるものではないから、これを一般的な保守的思惟が自覺的に高められた典型としての政治的保守主義について検討してみようと思う。政治的保守主義も一応は「現存社会秩序の維持」として把えられるにしても、その意味はかなり複雑である。この言葉の中には確かに過去の中に客体化されている力、即ち伝統の尊重がある。保守主義者にとつては物事は存在するというだけで既に高い価値をもっている。それは存在するという事実自体が思惟の中に解消されず、その根拠は更に高次の力の中にあるという信念が存在する一切のものを正当化する傾向をもつからである。更に存在するもの一般が徐々に生成して来たということも積極的価値をもつ。「歴史的時間は直線的な時間の延長ではなく……むしろ過去は潜在的に現在化しているということが時間体験に想像上の三次元性を与えているのである。」(マンハイム・イデオロギーとウトピ―第三部第三節) 私が次に述べる保守主義の形態は然し単なる伝統への復帰ではなく或程度の改革をも認める点において歴史的な経験を経てきた概念である。この場合、保守主義か進歩主義という二分法ではなく、反動主義の概念を挿入するのが便宜であろう。即ち吾々は進歩、保守、反動を夫々未来、現在、過去を信ずるものとして短く類型化することができる。今迄述べてきた処では保守を専ら反動と同視して用いて来たかに思われる節もあつたかにみえるが、併し伝統における求心性と遠心性の概念は既にこれらの区別を暗示して用いられたものである。即ち伝統の求心性は現在の地点において創造の根源に復帰しつゝ、未来的再創造への意志を含むかぎりここに述べる保守主義であり、遠心性は次第に客観化されて反動への途を開くのである。

歴史上にあらわれた「保守主義」なる言葉は一八一八年にシャトーブリアンがフランス革命によつて打破された政

治的・教会的制度の「保守」のために機関紙“Le Conservateur”を発刊したのに始まるそうであるが、一八三五年イギリスでトーリー党が“The Conservative Party”を自称し、以後この態度が政治理論のみならず、凡ゆる文化領域における思想傾向として用いられるようになった。併しこれは明確なイデオロギーというよりもむしろ日常的な思维態度であつて、その本質は変化を嫌悪し回避する守勢的気分であると同時に、現状の中に守るに足るものが本来的に存在すると考える肯定の態度であることは明らかである。

つねに引合いに出されるE・パークの古典的著作「フランス革命の省察」において既に闡明されているように(たゞしこれは保守主義の理論体系としてみると極めて読みにくい書物であるが)保守主義は現状の中に守るべきものと改善すべきものを弁別し、絶対的破壊の軽薄さと一切の改善を受けつけぬ頑迷さを共に排除しようとするものであり、旧制度の有益な部分を新しく附加された部分と共に尊重し、遅々としてはいるが継続的な進歩を政治の要諦とすることであつた。それは破壊的革命を拒否することにおいて歴史の進歩について価値的先取をしないと同時に、現状に則しつゝ新しい価値を受入れることにおいては頑冥な反動主義と異なる。この政治的保守主義の特質とも云わるべきものについて次にその理想型を列举してみよう。

(一)ペシミズム。理性批判或は人間性への不信。保守主義は人間性を完全なもの、完成されるものという観念をもたない。人間能力を過大評価せず、試みられぬ改革、未来を簡単に信用しない。これは自然理性の否定、活動的なことを悪とみる道徳的受動性を結果し、終には凡ゆる知的な自覚的決断の拒否ともなるのである。従つて保守主義の充足感 は行動の陶醉ではなく、禁欲された平靜な充足感である。

(二)非体系性。特殊な現実に向う傾向。保守主義は理論よりも生活に味方する。それは現実を以て或る程度価値の実

現態とみる故に、理論的体系よりも状況統制力を重視する。併しその主題の他者規定性は無原則な機會主義ではない。理論的にそれが一貫性をもたぬということは、それ自体保守主義的態度の一貫性より由来すると云えるであろう。従来 of 既存体制を擁護するには、その体制の慣習化した生活様式を維持すれば充分であるから体系化への志向は強烈ではない。これに対して急進主義は先づ既存社会の構造認識と未来的展望の基礎付けを持たねばならぬから必然的に理論的体系化への志向が強烈になるのである。

(三)連続或は調和の意識。保守主義は単に変化の拒否ではないが、保存と修正は二つの原理であつて革命による質的断絶は承認しない。実験よりも経験、自己表現よりも自己統制、秩序、均衡、温健の如き普遍的価値に重点を置こうとする。従つてそれは直ちに社会主義への反対ではなく、否定されるのはその中のジャコバンの要素であり、従来 of 伝統及び歴史を一掃する態度を非難するのである。それはまた自由に反対するものでもない。たゞ未知の実験に対する過信に対して個人を防衛するのは、個人の自由の最も本質的な部分を尊重することになるからである。

(四)貴族主義的精神。これは門閥的貴族と共に自然の貴族即ち精神的エリテをも意味する。これは政治に対して一種のゲームの態度をとり、超然性とフォームル(ユーモア)を尊重する。現状の分析と政治的権力そのものの非合理性への自覚は保守主義者のイロニイの源泉である。そのフォームルの態度は大なる決断の前に彼が立たされたときイロニイを以てする以外の途を教えない。これは政治に対する限界意識でもあろう。

(五)権威の觀念或はリアリズム。上述の貴族主義的精神にも通ずることであるが、貴族的精神は高い基準を設けて個人に名誉を与え、価値を峻別しようとする強い衝動をもっている。これは必然的に支配の正当性の根拠を或る種の権威におく。それは現実的或は宗教的権威でもありうる。自由は無制約的に自由ではなく、一定の規律の内において自

由である。保守主義者は自由を課すよりも現実に内在する価値の発見に努める。それがとかく中世的秩序に還ろうとするのも、文明社会は身分或は階級を必要とするというのも。すべて支配者のリアリズムに基づくものである。

政治的保守主義に関して以上の諸内容を前述の社会型態に則して検討してみよう。ここではマンハイムのように伝統主義対保守主義という問題の樹て方ではなく、政治的な保守性を非政治的なもの保守性と対比せしめているのであるから、歴史的社會が次第に動的過程となり社会的分化から諸階層の成立する近代の保守主義の発生状況を殊更に問題から避ける。即ち伝統的斥力が政治の領域に如何に作用するか、当面の問題である。

保守主義を現在への信仰とするとき、一般的に云えば社會が急速に動きつゝあつて安定した現在が存在の余地なく、過去と未来にのみ存在が残されているような状況においては保守的傾向は成立し難く、逆に社會が安定し、未来への理想を急速に視野に採り入れる必要のない場合には伝統的・保守的傾向が強く作用すると考えられる。ところで保守的世界觀の根柢にあるペシミズム乃至人間性への不信は、社會の急激な變動によつて旧秩序への信頼を失うか、或は大きな社会的打撃が未来への展望を喪失せしめるときであろう。これは必ずしも安定した社會とは云い難いからこの提言は一見矛盾しているように思われる。併し理性批判は旧秩序への批判から勃興した市民社會の伝統であるようにこのような時期には実践的・急進的傾向を生むと同時に、その対立としての保守主義が非体系的であつても最も自覺的に高められるのであつて、特にこれは(D)型の社会型態において顯著に認められるであろう。

調和、連続の意識に対応する社會は長い伝統をもち、質的な社會變動の經驗の少ない社會である。それは過去の歴史的蓄積とその慣性力に肯定的態度をもつこと、従つてそこに否定的原理を欠くことが特長とされる。これは(A)(D)型の社会型態に著しいが、この否定的原理の喪失が人為的に指導された權威主義的服従の表現とされる場合に

は(B)型にも認められる。これに関連して貴族主義的精神が考えられる。革命的決断を断絶の意識とすれば、高い意味でのフモールの意識には現実肯定、或は弁証法的連続意識の萌芽がある。フモールの精神が政治をゲームとみるのは、その政治がゲームの規則の中で動いている限りであり、この枠を無視すれば政治的寛容は宗教的献身と同視されねばならないであろう。ところで貴族主義が一定の身分秩序を前提するとすれば、(B)型或はその伝統を留める(D)型の社会型態に認められる。併し命令された社会では指導者はフモールのアンティ・テーゼを持たず、大衆はこれを圧迫された諷刺或は皮肉として表現する以外にない。従つて真のフモールは(D)型に著しく認められる。ちなみに吾が国において政治にフモールを欠くと評されるのは、吾が国が(B)型から(D)型への過渡期にあるからであろう。調和連続の意識が絶たれ、ゲームの一定の原理が確立されていない時に二分法的思惟の流行は当然であり、フモールは大衆に実感されず、局外者の自嘲に終ることが少なくないのである。

権威主義的観念は、社会的に是認された様式での行動としての伝統志向型の基本特長の中に見出される。即ち社会的責任感の欠如、現世の権威への恭順、人倫の重視、現実の容認、非合理的・情緒的行動などがこれである、これは(A)(B)(D)型、特に全体主義的社会に認められる。尤もここには積極面も無いわけではないが、この中には保守主義の具体的なものへの執着、思弁的なものへの嫌悪が顕著に認められる。この場合、思弁を本質とする知識人は保守的傾向をもちえないかという点必ずしもそうではない。それは知識に対する社会からの貶価によつて、彼が精神界に逃避せず、むしろ自らの地位を向上させる為に現世的なものに精進する(これは現在の米国に認められる)か、或は社会一般が理想主義的乃至急進的傾向にあるとき、知識人が周囲の社会に対し反射的・警告的にその反対の態度を表明するとき、彼は必然的に保守主義をその旗印に用いるのである。

この小論に述べたのは保守思想を排することでも擁護することでもない。併し吾々が現実の社会構造を分析し、そこに定置さるべき各種の保守乃至進歩的諸型態の科学的反省において吾々はパストに支配されがちな思惟の歪みを匡正しうるであらう。歐洲社会の気分が現在の吾々よりも保守的であるからといつてそれが直ちに吾々の理想とはならないし、吾々の社会的後進性という紋切的合言葉が直ちに急進主義を受入れる理由にはならない。況や無自覚な権威主義の中に否定的精神を眠らせてはならぬと共に、急速な社会的テンポの中に伝統的蓄積の歴史的感覺を失わせてはならない。また吾々自体の文化に対して次第に異邦人になりつゝある状況を反省すると同時に、時代と共に滅びゆく過去の遺物を徒らに惜しんではならない。ただ吾々は伝統の滅びに無関心な傍観者であつてはならぬ。吾々の文化的状況に対する正当な社会学的・理論的自覚において過去の伝統は未來的創造の中に生きるであらう。